

の性格を特徴づけようとしている。

第四章の「道長を中心とした歌壇の状勢」は本書の根幹となるべき部分である。まず勅撰集における道長の歌とされるものの当否を検討して、『勅撰作者部類』の記載を訂正し、次いで『御堂関白記』『小右記』『権記』などによって、道長関係の和歌行事を列挙する。さらに長保元年の彰子入内の料の屏風歌、同三年の東三条院四十賀の屏風歌、同五年の道長家歌合歌、寛弘五年の中宮御座の際の歌、寛仁元年の道長家大饗の屏風歌などの詠進者の顔ぶれから、道長をめぐる歌壇の性格について考察を加えている。

第五章「王朝時代歌人の歌壇の生活の諸相」は道長時代の歌人を女性と男性とに分けて、女性はサロン、男性はグループという観点から、その生活様相を考察したものである。

本書の内容は以上のごとくであるが、その性格を端的にいうならば、これは前著『勅撰集歌人伝の研究』の総論ともなるべきものである。したがって前著のすぐれた考証を踏まえた上で、本書に対することが望ましいが、さらに本書について特徴的なことは、独断に陥りやすい推測をつとめて避けていることである。すなわち著者は本書の随所において、種々の問題点を提起されるが、それを深追いしようとはされない。また重要な資料を数多く提示されるが、それについての解釈も控え目である。それは時には物足りなさを感じることもあるが、むしろ実証を重んじられる著者の真面目と解すべきであった。それは立論に当たって、諸説を総合してより妥当な見解を導き出そうとされる態度にも現れているのである。

しかしながら、あえて望蜀の言を述べさせて頂くならば、第四章において、道長の詠作を確定する作業に着手されながら、『御堂関白集』などに見える道長歌の検討を他日に譲られたのは残念である。また道長時代という、一つの政治的な時期を対象とされているのだから、その時代の政治的状勢を折り込む必要もあったろうし、さらに道長と彼をめぐる歌人たちとの交流を、もっと掘り下げて頂いたならば、道長時代の歌壇の性格もより特徴づけられたことだろう。

ともあれ、道長時代を俯瞰的に把握された本書の試みは、この時代を研究するための出発点となろうし、また丹念に集められた和歌関係の日記記事も、後学を資するところが大であろう。

(昭52・10 桜楓社刊・A5判 四二八頁 一五、〇〇〇円)

上坂信男「源氏物語往還」の頌

池田 勉

近代文芸の小説作品を書き進めてきた作家たちが、時いたって、古典文芸の世界に回帰する姿勢を示す現象がときどきに見られる。そのような古典への回帰の目標が二つある。それは源氏物語と芭蕉だというのが、近代文学に精通している長友高田瑞穂の説である。適切な卓説と私は信頼している。

ここに紹介しあげたい上坂さんの「源氏物語往還」と題す

る好著は、まさしく、その源氏物語への回帰を志向した近代作家たちの小説作品の分析と解釈とを通して、源氏物語の世界との往還の現象を捉えてみようとする独自の仕事を試みるものである。

年頭、春寒の風邪の床に臥せていたある朝、上梓されたばかりの瀟洒な新装のこの本が、私の枕頭に贈り届けられてきた。小康を得た病閑のつれづれに私はさっそくに読みはじめた。近代文芸の心と源氏物語の世界とが織りなす美しい交響曲を聴く思いであった。興味の尽きることを知らなかった。東京の夏が熱帯夜の連続といわれていた八月の一夜、上坂さんから電話で、この本の書評を書けという声をきいた。私などの評言を必要としないそれ自体の立派な業績の本であると思っていたが、私は言下に快諾の旨を答えた。この本を読んだご縁で私はいつしか上坂さんにひそかな友情を心にいだいていたからである。そこで改めてふたたび読み直してみたのであったが、興味のゆたかさは初読のときと少しも変らなかつた、のみならず、私はこの「往還」という上坂さん独自の発想と、その発想を方法として開拓される文芸の世界の不可思議な醍醐味に深く心誘われるものを感じた。そのことを書いてみたいと思うが、まずこの本の内容について一応の解説をすませるのが紹介の礼儀というものであらう。

三部から成るが、第一部には、現代における源氏物語の理解者である四人の作家とその作品が取りあげられる。川端康成の「古都」と「たんぼぼ」。谷崎潤一郎については、潤一郎論への序章に始まって「細雪」「夢の浮橋へ」。舟橋聖一の「好きな女の胸飾り」「朧月夜かんの君」。「円地文子では」「女面」「花散里」の二

作。

「古都」の構想は「ふた子の娘の物語」になる。千重子と苗子は北山杉の家に生れた一卵性双生児という設定になっている。千重子は京の街に棄てられ拾われて養家に成長した。苗子は千重子をさがしもとめて、ようやく祇園祭で逢うことができたが、この二人は容貌がよく似ているので、苗子は千重子とまちがえられて、千重子に思慕を寄せている秀男から声をかけられる。それがきっかけとなって、苗子は秀男から求婚されるにいたる。秀男は西陣の織屋の息子であつて、千重子の家とは身分差があり、千重子への思慕も諦めざるをえない境遇であることを知っている。それゆえに千重子に似る苗子を求めるのである。しかし苗子にとっては、千重子の身代りを求められる結婚は受けいれることができぬ。苗子を通してその背後に、秀男はつねに千重子への思慕を持ち続けるであらうことを想うと、身代りの女の悲しみが苗子には子感されるからである。千重子の身代り、形代となることを拒むかたい決意をもって、苗子はながくさがしもとめて逢いえた、その千重子のもとを離れ去つてゆく。「古都」の結末である。

ここで上坂さんは一つの問いを設ける。形代としての人物設定なら、酷似する容貌、濃密な血縁というだけで事は足り、姉妹というだけでよからうに、なぜ千重子と苗子を双生児にしなければならなかつたのか、と。それは千重子と苗子と二人の間に交流する感情の根基が「なつかし」の情にあることの根拠としての設定であらう、と上坂さんは考える。「なつかし」とは、源氏物語の時代の心情語で、離れているものに逢いたいと思う心の状態を示

すことばであり、また、その者に逢えば逢うたで、いつまでも一緒にいたいと願う心情を表わす形容詞である。そういう「なつかし」の心を分かち合う極限設定としての、一卵性双生児ではないか、と上坂さんは解釈する。とすれば、千重子と苗子とは、そのような「なつかし」の切実な深い間柄であるにもかかわらず、苗子は千重子の身代りとしての、秀男の求婚を拒む決意を立てて、千重子のもとを離れてゆく。その哀切な結末の場面に、上坂さんは「古都」の主題の核心を見透しているのである。

容貌の酷似や血縁のつながりをもって、人物の身代り、つまり形代を作り、物語の構想の展開を進めてゆく方法は、源氏物語の作者がしばしば用いたところである。藤壺の宮は帝にとって桐壺の更衣の形代であり、紫の上は源氏にとって藤壺の宮の形代であった。そして浮舟は薫にとって大君の形代であったが、形代となった女の悲しみを浮舟は表現する。「夢の浮橋」の結末は、肉親の情をなつかしみ、薫の心をしのびながらも、形代の身に帰ることを拒んで、浮舟は薫を離れてゆくのであった。そういう哀切な夢の浮橋巻の結末の場面にかさねて、「古都」の結末の印象的な場面を、上坂さんは見透しているのである。だから、「苗子も浮舟も、千重子離れ、薫離れするところに、それぞれ自分の新生の道を発見するであらう。」と、苗子を見送るのである。

川端が、いつか私も私の源氏物語を書いてみたいと願っていたことや、また「浮舟」と題した作品を書いていることは、川端にとつての源氏物語が、制作についての思惟の源泉として有力なものであったことを想わせるし、その関心が、源氏物語の作者の思

惟、問題意識の凝縮した宇治十帖に深く寄せられていたことを推測させる。これが川端康成と源氏物語との関わりかたを解析した上坂さんの結論である。すぐれた「古都」論の精確さである。もとより、「古都」の中に源氏物語の往く方を見定めるためには、上坂さんの平安朝文学、とりわけ源氏物語についての深い理解と造詣を前提とする。この前提にもとづく上坂さんの眼光が、「古都」の主題の核心を見透すのである。主題の核心はその眼光に点火されて、意味の美しい焰をあげる。そしてその火の穂は源氏物語へ還っていった、この物語の鎮めていた意味の輝きを新たにする。これが源氏物語の世界と「古都」の抒情詩を包みこんで観る「往還」の構造であった。

谷崎の作品「蘆刈」にも「形代」の手法が用いられている。蘭たけた美しいお遊さんを思慕する慎之助に、お遊さんの妹のお静が、姉の形代として、その形だけの妻になるという構図である。お遊さんを神聖化する慎之助の妻となつて、慎之助とともにお遊さんの幸福に奉仕しようというのである。そのためにお静は形代としての妻に徹し、形代として殉じようと決意する。形代という方法について、川端の苗子は形代になることを拒み、谷崎のお静は形代に殉じようと決意する。この二つの在り方には、川端と谷崎との作家の型の根本的な差異がうかがわれて興味ふかい。

谷崎の大作「細雪」は源氏物語との関連を高く評価された作品であるが、この点について上坂さんは次のように評している。谷崎は「細雪」制作のために源氏物語の美点長所を意識して、あるいは無意識の間に、多く摂取活用しているが、それは描写の方法

としての限界内にとどまり、作者の問題意識という面では、源氏物語の心を受けとめることをしていない。源氏物語と谷崎とは、創作の態度において異質である、と。この指摘は、源氏物語と谷崎文芸との根本的な距離の遠さを明かにしたものであるとして注目し値する。

円地文子の作品については、六条御息所の女としての生理の強みの中に古代の巫女のいのちを見いだして、そのような性能をもつ近代女性を描いたり、また花散里に女の生き方としての新しい意味を賦与して、この境地に到達する女性を造型したりすることが、この女性作家の特徴として説明される。これも源氏物語の作中人物が作家の近代的個性にもとづいて近代文芸の中に新しい装いを与えられて、生かされ生きている姿態であろう。そしてこの人物解釈はまた源氏物語の人間像に新しい彩りを加えるのである。

第二部には、樋口一葉・雌伏の歲月―「蓬生日記」を中心として、志賀直哉・意志と運命―「暗夜行路」論、井上靖・秘密と演技―「あすなろう」から「憂愁平野」へ、究極の和解―「星と祭」をめぐって―。この三作家の作品において、源氏物語との関連が考えられる。このうち私は志賀直哉「暗夜行路」論に読みいたって、あつと声をのむような、予期しない驚きを経験した。その「主人公が前半では母の不義の子である故に苦しみ、後半では自身の細君の不義で苦しむ事を書くつもり」のものであったことは、作者の「創作余談」によって知られているが、宇治十帖の薫の場合が、やはり「母の過誤、自分の出生に暗いかげりを感じて

悩んだ彼が、のちには妻の過誤を経験させられる」という、この主題の類似している点についての上坂さんの指摘であった。このような主題の類似は、上坂さんも言うように、おそらく暗合というものである。しかし暗合であろうが故にかえて、このような主題の類似性が生まれることに、私は文芸という人間の営みの不可思議な摂理に心惹かれるのである。

井上靖の前記の作品には、人間関係の和合や調和をはかるために、秘密の固守や善意の演技が他者への思いやりとして必要なことが説かれたり、また究極の和解のために宗教的なものが大きなはたらきを持つことが、作品の主題となっているが、このような人間社会の倫理や宗教的なものの力を主題とする問題意識を抛り所として、源氏物語の世界に還り視るとき、それらの徳目に見あうものとして上坂さんの引きあがる源氏物語の場面例が、なんと新しい光彩をはなつて美しい輝きを見せることであろうか。

源氏物語の生命が近代文芸の世界に往って洗われ、返照となってふたたび源氏物語の世界に還って、物語の文脈のひだに黙していたものに、ことばを与えて語らせるからであろうか。このような「往還」の構造と機能を文芸の世界に捉えてみせたのが、この「源氏物語往還」の見事な成果であった。文芸科学の一つの新しい道を開拓するものといえる。

なお、第三部には、芥川龍之介・良秀像の変貌―「地獄変」をめぐって―、堀辰雄・「かげろふの日記」、有島武郎童話賞書、坪田譲治「子ども聖書」ノート、を収める。

(昭53・1 笠間書院 A5判 三〇三頁 二、二〇〇円)